

メタ動機づけ尺度作成の試み

赤間 健一

Development of metamotivation scale

Kenichi AKAMA

メタ動機づけ尺度作成の試み

赤間 健一

Development of metamotivation scale

Kenichi AKAMA

概要

本研究では、メタ動機づけを測定するための尺度作成を行った。研究1では、動機づけの制御、メタ動機づけの知識、動機づけ観、に関する項目を作成し、尺度の構成を試みた。その結果、メタ動機づけ的活動、メタ動機づけの知識、コントロール不能観、動機づけへの無関心の4因子が抽出され、尺度を構成した。研究2では、研究1で構成した尺度の信頼性と妥当性を検討した。その結果、内的一貫性、再検査信頼性、因子妥当性、構成概念妥当性のいずれにおいても尺度として使用可能な水準の信頼性・妥当性が確認された。メタ動機づけの知識やコントロール不能観、動機づけへの無関心はメタ動機づけ的活動を介して、動機づけ始発方略の使用につながり、動機づけに影響するという動機づけ始発過程についても示したが、メタ動機づけの知識についてはさらなる検討が必要な可能性も示した。

キーワード：メタ動機づけ 動機づけ調整 動機づけ始発方略 動機づけ

動機づけの問題

日常生活において、やらなければならないことがあるにもかかわらずどうしてもやる気にならない、まだ終わっていないがやめてしまいたい、など行動する必要があるにもかかわらず行動する気が起きない、あるいは行動し続けなくてはならないがやめてしまいそうになるという経験は少なからずあるのではないだろうか。このような場合、何とかしてやる気を出して行動し始めたり、やる気を維持して行動し続けたりすることが必要になる。これは動機づけ調整 (motivational regulation) と呼ばれる。動機づけ調整は、特定の活動や、目標の達成のための意志を始発、あるいは維持するために行われる行為と定義されている (Wolters, 2003)。

近年、動機づけ調整に関する研究が増加しているが、これは Wolters (1998) から始まったといえるだろう。Wolters (1998) は、動機づけの自己調整のために用いられる方略の特定を行い、動機づけとの関連を示すことから始めた。その後、動機づけ調整方略の特定がなされ、動機づけや学習方略、持続性に対する動機づけ調整方略の影響が明らかになってきた (伊藤・神藤, 2003; Schwinger, Steinmayr, & Spinath, 2009, 2012; 梅本, 2013; 梅本・田中, 2012; Wolters, 1999)。

しかしながら、動機づけ調整について理解するためには、方略の種類やその影響の理解だけで十分ではない。

例えば、そもそも動機づけの調整が必要かどうかということに気づいていなければ調整するはずもなく、さらにその気づきを生じさせるものは何かということも明らかにする必要があるだろう。動機づけ調整研究に欠けているものとして、Wolters (2011) は、動機づけを調整しようという意志や調整の必要性への気づき、さらに何によって動機づけられやすいのかといった自身の動機づけの特徴や、動機づけやすさに関する動機づけ調整方略の有効性などの知識についても検討する必要性を指摘している。

動機づけの調整の必要性への気づきや、調整がうまくいっているかどうかということは、動機づけ状態に対するモニタリングにより把握することができるだろう。また、その時の動機づけの状態に応じて調整を行うかどうかという判断や、調整を行う際に使用する調整方略の選択や方略の実際の使用も必要となる。さらに動機づけ調整方略を使用する際には、自身を動機づけやすい方略かどうか、その方略が利用可能な状況かどうかといった動機づけに関する知識に基づいて判断がなされるだろう。このような動機づけの調整は、Wolters (2003) も指摘しているように、モニタリングとコントロールによる認知の制御 (Nelson & Narens, 1990)、さらに認知の知識 (Flavell, 1979) からなるメタ認知と類似している。そのため、動機づけ調整におけるこれらの側面は、動機づけに対するメタ認知という意味で、メタ動機づけ

(metamotivation) と呼ばれる。

メタ動機づけ

村山 (2014) は、メタ動機づけを、動機づけに対する認識とし、やる気をうまく出すことができないのは、この認識が不正確であるためと指摘した。例えば、やる気を出すために有効な方法もメタ動機づけの一部であるが、有効ではない方法を有効だと思い込み、使い続けると、やる気がでるはずもなく、うまくいかないことを繰り返すことになる。その結果、やる気はコントロールできない、という認識も形成されることになるだろう。メタ動機づけは、動機づけに特化したメタ認知と考えると、その構造はモニタリングとコントロールからなるメタ動機づけ的活動と知識的側面であるメタ動機づけの知識からなると考えられる (赤間, 2016)。村山 (2014) が指摘した認識の問題はメタ動機づけの知識の問題といえるだろう。

動機づけ調整をうまく行うことができない理由は、他にもあるだろう。例えば、モニタリングができていないために自身の動機づけ状態を把握すること自体ができておらず、調整が必要な場面でも調整しないことや、メタ動機づけの知識が不足しているため、調整するための方略を持ち合わせておらず、調整する必要性を認識していても調整することができない場合なども考えられる。

メタ動機づけの知識の動機づけに対する影響を扱った数少ない研究の一つとして、Kuhl & Kraska (1989) は、すべき行動を行うための意志を持続することが困難な状況において、動機づけの制御や情動の制御などに関して、意志の持続や動機づけの維持に有効と思われる方略を示す二つの選択肢を提示し、方略の有効性に関するメタ動機づけ知識を測定した。その結果、知識があるほど妨害要因の影響を受けず、動機づけを維持することを示した。

しかしながら、現在までのところ、メタ動機づけに関する研究は少ない。そこで本研究では、メタ動機づけ研究を進めていくために、メタ動機づけを測定するための尺度の作成を行うことを目的とする。研究1で項目の選定を行い、研究2で信頼性と妥当性を検証する。

研究1

研究1では、メタ動機づけの測定尺度を構成することを目的とする。しかし、メタ動機づけを扱った研究が少ないため、測定項目を作成する前にメタ動機づけの各要素の特徴を考える必要があるだろう。

メタ動機づけは基本的にメタ認知と類似しており、メタ認知と完全に区別することは難しい (Wolters, 2003)。しかしながらこのことは、メタ動機づけについてメタ認知を参考に考えることが可能であることも意味する。まず動機づけの制御の側面は、メタ認知のモニタリングとコントロールに従い (Nelson & Narens, 1990, 1994)、コントロールは制御対象である動機づけの状態を修正

し、モニタリングはその際に必要となる情報を獲得する機能を果たすと考えてよいだろう。例えば、動機づけ調整が必要かどうか、または調整がうまくいっているか、など動機づけ状態の情報をモニタリングにより獲得し、その情報を基に、コントロールが行われることで、動機づけることを妨害する要因の除去や動機づけの調整方略の選択などにより動機づけを目標とする状態に変容させたり、望ましい状態を維持しようとしたりすると考えられる。

さらに、コントロールを行う際には、モニタリングで獲得した情報だけではなく、動機づけについての知識であるメタ動機づけ知識も利用されると考えられる。メタ動機づけ知識は、メタ認知的知識 (Flavell, 1979) と同様に、どのような時に動機づけられやすいのか、などの自身や人一般についての動機づけに関する知識や、Kuhl & Kraska (1989) の課題のように動機づけの維持が難しい場面や、行動が求められる対象による動機づけられやすさの違いなどの知識、さらに、どのような方略が自分に向いているのか、など動機づけ調整方略についての知識などが含まれると考えられる。

また、メタ動機づけの知識の要素として、動機づけ観についても測定を試みる。動機づけ観とは、「やる気はコントロールできない」といった動機づけに対して人が持つイメージであり (赤間, 2016)、動機づけそのものについての認識である。もしも、動機づけが制御不能であるという動機づけ観を持っていれば、動機づけを調整しようという意志は生まれまいだろう。そのため、メタ動機づけの活動も行われず、メタ動機づけの知識の獲得も進まないと考えられる。また、その結果として、調整する意思の欠如の形として自身の動機づけに対する無関心さにもつながると考えられる。そのため、動機づけの問題を考える際に、動機づけ観について考慮する必要性があるだろう。そこで、動機づけ観として、動機づけ調整にマイナスに作用すると考えられる動機づけのコントロール不能観を、またその結果として想定される動機づけへの無関心さも測定する。

方法

調査参加者 私立大学において心理学の講義を受講する大学生289名 (男性155名, 女性134名, 平均年齢20.46 ($SD=1.44$) 歳) が調査に参加した。

調査内容 動機づけの制御、メタ動機づけ知識、そして動機づけ観と動機づけへの無関心さを測定するために作成した21項目について、1. 当てはまらない、から、5. 当てはまる、までの5件法で回答を求めた。項目作成に当たり、調査参加者にとって動機づけという表現は一般的ではない可能性を考慮し、やる気という表現を用いた。

手続き 講義終了時に質問紙を配布し、回答を求め、その後回収した。回答は参加者自身のペースで行った。

調査の実施において倫理的配慮として、調査協力者には、回答は強制ではなく、途中で回答をやめることも可能であること、データは匿名で扱い研究以外の目的に使用しないこと、プライバシーの問題がないこと、を書面にて提示し、同意できる場合は、同意書に署名を求めた。

結果及び考察

尺度構成のために、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い因子の抽出を行った。初期固有値の減衰状況、尺度の解釈可能性から因子数は4に指定した。単純構造が得られるよう、複数の因子に.35以上の負荷量を示した項目、いずれの因子にも負荷量が.35より低い項目を削除し、各項目が、いずれかの因子に対し負荷量が.35以上になったところで分析を終了した。最終的に得られた因子パターン、及び因子間相関をTable1に示した。

因子分析の結果、「どうすればやる気が出るかわかっている」などの自身のやる気についての知識を反映した「メタ動機づけ的知識」、「自分のやる気の状態に気を配っている」「やる気を出そうと努力している」といったモニタリングとコントロールを含む「メタ動機づけ的活動」、動機づけ調整への意志として「自分のやる気について興味がない」などの「やる気への無関心」と、「どうして

もやる気になれない」などの「コントロール不能観」の4因子が抽出された。因子間相関は、いずれも高いものではなかったが、メタ動機づけ的活動とメタ動機づけ的知識は正の相関関係にあり、やる気への無関心とコントロール不能観とはそれぞれ負の相関関係にあった。やる気への無関心とコントロール不能観は正の相関関係にあった。

次に、各因子に高い負荷量を示した項目から尺度を構成し、各尺度の信頼性を検討するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、メタ動機づけ的活動(5項目)は.72、メタ動機づけ的知識(3項目)は.77、またやる気への無関心(3項目)は.71、そしてコントロール不能観(3項目)は.68とそれぞれ信頼性は高いとまでは言えないものの尺度として使用しうる範囲であったと判断した。以上から、全14項目からなるメタ動機づけ尺度を構成した。研究2において、本尺度の妥当性、信頼性の検討を行う。

研究2

研究2では研究1で構成したメタ動機づけ尺度の妥当性・信頼性を検討することを目的とした。 α 係数の算出による内的整合性の確認と、2度の調査を行い、2時点での同一尺度の得点間の相関係数から再検査信頼性を検

Table1. メタ動機づけ尺度の因子パターン及び因子間相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	因子				<i>h</i> ²
			<i>F1</i>	<i>F2</i>	<i>F3</i>	<i>F4</i>	
メタ動機づけ的活動 ($\alpha=.72$)							
やる気を出そうと努力している	3.46	1.03	.73	-.17	.05	-.01	.48
自分のやる気の状態に気を配っている	2.79	1.14	.59	.10	.03	.01	.39
やる気になれるような理由を考える	3.35	1.11	.55	-.02	-.09	.02	.33
自分がやる気になっているか考える	3.06	1.07	.54	.13	.06	.05	.34
やる気をなくす原因をなくそうとする	2.86	1.13	.50	.11	.03	-.05	.30
メタ動機づけ的知識 ($\alpha=.77$)							
どうすればやる気が出るかわかっている	3.19	1.16	-.03	.74	.05	-.04	.56
どういう時に自分がやる気になるかわかっている	3.60	0.98	-.02	.73	-.13	.05	.54
自分をやる気にするための方法を知っている	3.10	1.19	.17	.69	.02	.00	.58
やる気への無関心 ($\alpha=.71$)							
自分のやる気について興味がない	3.47	1.21	.10	.02	-.71	-.08	.59
やる気については考えない	3.13	1.22	.06	-.01	-.71	-.10	.60
やる気があるかないかは気にしない	3.08	1.17	-.18	.05	-.64	.17	.34
コントロール不能観 ($\alpha=.68$)							
どうしてもやる気になれない	3.11	1.23	.01	-.07	-.03	-.87	.68
やる気を出そうとしてももうまくいかない	2.83	1.15	-.16	.22	.11	-.58	.43
やる気がなくても何もしない	3.09	1.15	.09	-.08	-.02	-.52	.27
			<i>F1</i>				
				<i>F2</i>			
					<i>F3</i>		
						<i>F4</i>	

討する。妥当性については確認的因子分析による因子妥当性、動機づけ始発方略、動機づけ概念との関係から構成概念妥当性を検討する。

構成概念妥当性を検討するにあたり、メタ動機づけ、動機づけ始発方略、動機づけの間には以下の関係が予測される。

メタ動機づけの要素間では、研究1において因子間相関が見られたこと、モニタリングによって得た情報や知識を用いてコントロールを行うと考えられることから、メタ動機づけの活動に対し、メタ動機づけの知識が正の、やる気への無関心、コントロール不能観が負の影響を示すと予想される。また、メタ動機づけと動機づけ始発方略の関係については、モニタリングとコントロールにより動機づけの制御を行うメタ動機づけの活動は、動機づけ調整方略の使用を促し、結果として動機づけを高めることに寄与すると考えられるため、メタ動機づけの活動は動機づけ始発方略に正の影響を示すと予想される。また、やる気への無関心やコントロール不能観が高い場合は、自身を動機づけようとしにくい可能性がある。この点を確認するため、赤間(2015)において、動機づけ始発方略とともに抽出された、動機づけることが必要な場面においても動機づけようとしにくいという調整放棄も含める。やる気への無関心とコントロール不能観は、調整放棄に直接的に正の影響を示すと予想される。

動機づけとして大学生が最も動機づけの調整を必要とする授業に対する動機づけ(赤間, 2012a)について、内発的動機づけ、行動の価値を認めている高自律的外発的動機づけ、そしてしなくてはならないからするといった行動の価値は見いだせていない低自律的外発的動機づけの3つの動機づけを扱う(赤間, 2012b; 安藤・布施・小平, 2008)。また動機づけ方略として行動の始発のために自身を動機づける動機づけ始発方略を扱う(赤間, 2015)。動機づけ調整には、行動を起こすために動機づける動機づけの始発と進行中の行動を維持するための動機づけの維持(赤間, 2015; Wolters, 2003)が含まれるが、この両者は同一の過程によって動機づけを調整しているかは今のところ不明である。そのため、動機づけの問題として、すでに行っている行動の維持よりも行動を始発していない場合の方が重大であると考えられるため、まず行動の始発のために自身を動機づける際の動機づけ調整について検討する。動機づけ始発方略には、自分にとっての行動の価値を見出す価値づけ方略、終了後に自身に報酬を用意する自己報酬方略、行動しなかったときに生じるデメリットをイメージする罰想起方略、他にやりたいことを先にしてしまうなどの欲求解消方略、他者と共に行動する社会的方略の5方略が含まれる。赤間(2015)が示した動機づけ始発方略と動機づけの関係から、価値づけ方略は内発的動機づけと高自律的外発的動機づけに正の影響を示し、罰想起方略は低自律的外発的動機づけに正の影響を示すと予想される。以上の関

係が見られるかどうかを確認することでメタ動機づけ尺度の構成概念妥当性を検討する。

方法

調査参加者 京都府内の私立大学に在籍する大学生449名(男性269名, 女性229名, 不明1名, 平均年齢20.4(SD=1.8)歳)が調査に参加した。

調査内容 **メタ動機づけ** 研究1で作成した「メタ動機づけ知識」3項目、「やる気の制御」5項目、「やる気への無関心」3項目、「やる気への無調整」3項目の計14項目について、1. 当てはまらない、から、5. 当てはまる、までの5件法で回答を求めた。**動機づけ始発方略** 価値づけ方略(「自分のためだと考える」などの4項目)、自己報酬方略(「終わった後にできる楽しいことを考える」などの4項目)、罰想起方略(「やらなかった場合にどうなるかを考える」などの4項目)、欲求解消方略(「やりたいことを先にしてから始める」などの5項目)、社会的方略(「友達と一緒にする」などの3項目)の5つの方略に加え、調整放棄(「やることをあきらめる」などの3項目)を測定する計23項目を使用した。1. 全くしない、から、6. いつもしている、までの6件法で回答を求めた。**動機づけ** 赤間(2012b)の授業への参加に対する自己決定尺度を使用した。内発的動機づけ(「授業に興味を持っているから」など4項目)、高自律的外発的動機づけ(「授業に出席することが私の将来のためになるから」)など4項目、低自律的外発的動機づけ(「授業に出席することは当然しなければならないことだから」など8項目)の計16項目を使用した。1. 当てはまらない、から5. 当てはまる、までの5件法で評定を求めた。

手続き 講義終了時に質問紙を配布し、回答を求め、その後回収した。回答は参加者自身のペースで行った。再検査信頼性の検討を行うために、2度調査を行った。2度目の調査は1度目の調査の4~5週間後に行った。動機づけ始発方略は、1度目のメタ動機づけ尺度と同時に、動機づけについては、その1週間後に調査を実施した。調査の実施において倫理的配慮として、調査協力者には、回答は強制ではなく、途中で回答をやめることも可能であること、データは匿名で扱い研究以外の目的に使用しないこと、プライバシーの問題がないこと、を書面にて提示し、同意できる場合は、同意書に署名を求めた。複数回にわたる調査であるため、一連の調査において同一者の回答であることを把握する必要性から、個人が特定できないような任意のIDを作成させ、それによりデータの突合を行った。

結果及び考察

研究1で得られた尺度の信頼性を確認するために、 α 係数を算出し内の一貫性を確認したところ、メタ動機づけ的活動($\alpha=.72$)、メタ動機づけ的知識($\alpha=.71$)、やる

気への無関心 ($\alpha=.70$), コントロール不能観 ($\alpha=.62$) のいずれも許容できる値であり, 一定の信頼性は確認された。次に, 再検査信頼性を検討するために, 2度の調査への回答が得られた165名 (男性86名, 女性79名) のデータを用い, 2度の調査の得点間で相関係数を算出した。その結果, メタ動機づけ的活動 ($r=.59, p<.001$), メタ動機づけの知識 ($r=.44, p<.001$), やる気への無関心 ($r=.56, p<.001$), コントロール不能観 ($r=.53, p<.001$) のいずれにおいても .4から .6の間で中程度の相関であり, 全体的に高くはなかった。これは, メタ動機づけの特徴として, 個人内での一貫性が全くないわけではないのだろうが, 特性のような安定的なものではなく, 動機づける対象や場面などに依存して変化しやすい状態依存的な特徴を表しているためかもしれない。今後, 対象や場面別など, 詳細に検討する必要があるだろう。

妥当性について, まず確認的因子分析により因子妥当性を検討した。最尤法により推定し, 研究1において因子間相関が見られた潜在変数間のみに関連の存在を仮

定した。その結果, 適合度は, $\chi^2(64)=111.35, p<.001$, GFI=.97, AGFI=.95, CFI=.97, RMSEA=.04と十分なものであり, 因子妥当性が確認された。

次いで構成概念妥当性を検討するために, 全ての項目に回答が得られた338名 (男性178名, 女性160名) のデータを使用し, メタ動機づけ, 動機づけ始発方略, および動機づけ間の関連を検討した。全変数の平均値, 標準偏差および変数間の相関係数を Table 2に示した。

構成概念妥当性の検討のため, 上述のメタ動機づけ, 動機づけ始発方略, 動機づけの予測される関係を, 今日分散構造分析により検討した。また, 全ての動機づけ始発方略間, 動機づけ間の誤差項に共分散を仮定した。分析の結果, 適合度は, $\chi^2(49)=117.74, p<.001$, GFI=.95, AGFI=.91, CFI=.94, RMSEA=.06でありモデルに対するデータの当てはまりは許容される範囲であったが, 有意ではないパスも含まれていたこともあり, 修正指標も参考にモデルの修正を行ったのち, 再度分析を行った。その結果, 適合度は, $\chi^2(46)=78.49, p<.01$, GFI=.97,

Table2. 全変数の平均値, 標準偏差及び相関係数

	M	SD	1	2	3	4	5	6
メタ動機づけ								
1 メタ動機づけ的活動	3.14	0.69	-					
2 メタ動機づけの知識	3.22	0.67	.34***	-				
3 やる気への無関心	3.03	0.67	.48***	-.01	-			
4 コントロール不能観	2.90	0.81	-.26***	.16**	-.07	-		
動機づけ始発方略								
5 価値づけ方略	3.80	0.94	.42***	.22***	.13*	-.26***	-	
6 自己報酬方略	4.06	1.10	.34***	.16**	.22***	-.10	.42***	-
7 罰想起方略	3.88	0.94	.28***	.08	.19***	-.11	.48***	.46***
8 欲求解消方略	3.76	0.89	.12*	-.05	.28***	.06	.10	.30***
9 社会的方略	2.64	1.07	.07	.01	.17**	.01	.15**	.21***
10 調整放棄	2.47	1.07	.04	-.11*	.22***	.25***	-.12*	-.02
動機づけ								
11 内発的動機づけ	3.40	0.90	.09	.11*	.01	-.09	.27***	.13*
12 高自律的外発的動機づけ	3.82	0.87	.20***	.12*	.04	-.18**	.34***	.18***
13 低自律的外発的動機づけ	3.03	0.89	.20***	.11*	.18***	-.02	.23***	.23***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table2. 全変数の平均値, 標準偏差及び相関係数 (続き)

	7	8	9	10	11	12	13
メタ動機づけ							
1 メタ動機づけ的活動							
2 メタ動機づけの知識							
3 やる気への無関心							
4 コントロール不能観							
動機づけ始発方略							
5 価値づけ方略							
6 自己報酬方略							
7 罰想起方略	-						
8 欲求解消方略	.27**	-					
9 社会的方略	.20***	.25***	-				
10 調整放棄	-.04	.33***	.28***	-			
動機づけ							
11 内発的動機づけ	.11*	.14*	.11*	-.02	-		
12 高自律的外発的動機づけ	.23***	.13*	.06	-.07	.71***	-	
13 低自律的外発的動機づけ	.38**	.29**	.21***	.10	.35***	.56***	-

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

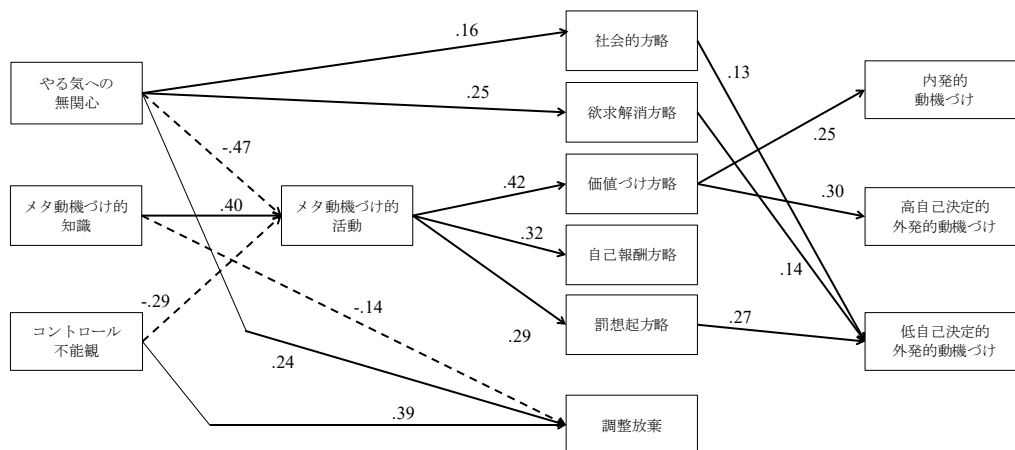


Figure1. メタ動機づけ、動機づけ始発方略、動機づけの因果モデル

※図中の実線は正の、破線は負の影響を示す

AGFI=.94, CFI=.97, RMSEA=.05でありモデルに対するデータの当てはまりは十分であった。結果を Figure1に示した。

メタ動機づけについては、予測通り、メタ動機づけ的活動に対し、メタ動機づけの知識が正の、やる気への無関心とコントロール不能観が負の影響を示した。メタ動機づけ的活動から動機づけ始発方略への影響については、価値づけ方略、自己報酬方略、罰想起方略に対しては、正の影響が見られたが、社会的方略と欲求解消方略に対しては有意な影響は見られなかった。この二つの方略に対しては、やる気への無関心が正の影響が見られた。調整放棄に対しては、予測通り、やる気への無関心とコントロール不能観が正の影響を示したのに加え、メタ動機づけの知識から弱いながら負の影響が見られた。動機づけに対しては、予想通り、価値づけ方略が内発的動機づけと高自律的外発的動機づけに、罰想起方略が低自律的外発的動機づけに影響していた。また予想していなかった結果として、社会的方略と欲求解消方略が低自律的外発的動機づけに弱いながら正の影響を示した。予想と異なる部分も一部見られたが、その影響指標は.2未満の弱いものがほとんどであり、メタ動機づけ、動機づけ始発方略、動機づけの関係はおおよそ予想と一致した結果であり、メタ動機づけ尺度の構成概念妥当性も確認できたと判断した。以上より、メタ動機づけ尺度は一定の信頼性と妥当性を持つ尺度として利用可能と考えられる。

総合考察

本研究では、Wolters (2011) の指摘やメタ認知 (Flavell, 1979; Nelson & Narens, 1990) を参考に、メタ動機づけの要素を仮定し、その測定尺度の作成を試みた。研究1において、メタ動機づけ的活動、メタ動機づけの知識、動機づけ調整の意志の欠如の指標として、やる気への無関心とコントロール不能観という要素を測定する項目を選定し、研究2において尺度の信頼性と妥当性を検討した。その結果、メタ動機づけ的活動、メタ動機づけ

の知識、やる気への無関心、コントロール不能観という4下位尺度14項目からなる尺度が構成され、一定の信頼性と妥当性を示すことができたと考えられる。

また、研究2において、メタ動機づけ、動機づけ始発方略、動機づけの関係を検討したが、その中で、予測と異なる関係が見られた。影響は弱いものの、やる気への無関心が、メタ動機づけの活動を介さず、直接的に社会的方略と欲求解消方略に正の影響を示していた。これは、自身の動機づけ状態に無関心であるほどこれらの方略を使用する傾向があるということであり、これらの方略が動機づけを調整しようという意志によって使用されているのではない可能性を示唆する結果である。動機づけに対する影響においても、赤間 (2015) では動機づけと無関係であり、本研究においては、低自律的外発的動機づけにのみ弱い正の影響を示したのみであった。そのため、動機づけ始発方略としては望ましいとは言えず、内発的動機づけや高自律的外発的動機づけにつながる方略の使用を促すためには、まずは自身の動機づけに対し関心を持たせることが必要であると考えられる。

しかしながら、本尺度にはいくつかの限界があり、さらなる検討が必要な可能性がある。一つは、本尺度は大学生を対象に作成されたものであり、より低年齢の児童・生徒に対して使用できるかどうかについてである。特に、メタ動機づけの知識は、自身を動機づけやすい方略や自身が動機づけられやすい状況などに関する項目から構成されており、調査対象者が低年齢になるほど、尺度としての内的整合性を維持できなくなる可能性がある。例えば、どのような時にやる気になりやすいかはわかっている、どうすればやる気になりやすいかはわからない、ということが起こり得るためである。これは、Kuhl & Kraska (1989) が示したように、小学生では学年が上がるにつれ、メタ動機づけ知識が増えていくため、経験などから獲得されるメタ動機づけ知識が低年齢であるほど少ないためである。さらに、その知識内容により、知識の増大の時期が異なることもあり、本尺度に含まれる項目だけではその知識の差異を把握しきれない可能性

がある。そのため、特に、メタ認知的知識に関しては、より詳細に測定するために、項目の追加・修正が必要となる可能性がある。

また、別の視点からもメタ動機づけの知識についての検討が必要な可能性がある。本研究ではメタ動機づけの活動が価値づけ方略、自己報酬方略、罰想起方略の使用につながることを示した。動機づけへの影響から考えると価値づけ方略の使用を促すことが望ましいと考えられるが、これらの方略間の使い分けについては情報を得ることができなかった。赤間 (2014) は有効性の認知がその一つであることを示しているが、方略の選択に関わるメタ動機づけ的知識が何なのか、それを明らかにしないことには、より望ましい動機づけ状態へと調整するための介入はできないだろう。この点からもメタ動機づけの知識をより詳細に検討する必要があると考えられる。

もう一つは、動機づけの維持におけるメタ動機づけの検討である。本研究は、動機づけを調整する必要性に気づきやすい行動の始発のための動機づけ調整場面を対象とし妥当性の検討を試みた。動機づけの始発と維持については、Boekarts (1995) は、メタ動機づけ的な自己調整の要素として、自身にとって好ましい認知や感情を活性化し、ポジティブな状態と学習への意志を生み出す動機づけの制御と、Kuhl & Kraska (1989) が扱った方略に関する知識を利用して意志を維持する活動制御があることを指摘しており、赤間 (2015) も、同様に活動を始めるための動機づけ始発方略と、活動を持続させるための動機づけ維持方略を区別する必要性を指摘した。行動中は動機づけが低下していても行動が即時に終了するとは限らないため、低下していたとしても行動を維持することが可能な水準にある間は動機づけの低下に気づくことができない可能性もあり、行動中の動機づけの低下による調整の必要性に気づくことは始発する場合よりも難しいと考えられる。そのため、活動中の動機づけの維持においては、調整の必要性への気づきがより重要になるだろうし、低下している原因とその対応に有効な動機づけ維持方略の選択・実行が必要になるだろう。メタ動機づけに関する研究は少なく、動機づけ調整過程を明らかにしていくためによりいっそうのデータの蓄積や理論的な発展が求められる。

引用文献

赤間健一 (2012a). 動機づけから考える大学生にとっての授業人間文化研究, **29**, 125-151.
 赤間健一 (2012b). 友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度、動機づけの関連の検討 人間文化研究, **30**, 51-74.
 赤間健一 (2014). 動機づけ方略の使用における有効性とコストの認知の影響 日本心理学会第78回大会発表論文集発表論文集, 925.
 赤間 健一 (2015). 動機づけ始発方略尺度の作成 心理学研究, **86**, 445-455.

安藤史高・布施光代・小平英志 (2008). 授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響—自己決定理論に基づいて— 教育心理学研究, **56**, 160-170.
 Boekaerts, M. (1995). Self-regulated learning: bridging the gap between metacognitive and metamotivation theories. *Educational Psychologist*, **30**, 195-200.
 Flavell, J. H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring: A new area of cognitive- development inquiry. *American Psychologist*, **34**, 906-911.
 伊藤崇達・神藤貴昭 (2003). 中学生用自己動機づけ方略尺度の作成 心理学研究, **74**, 209-217.
 Kuhl, J. & Kraska, K. (1989). Self-regulation and metamotivation: computational mechanisms, development, and assessment. In R. Kanfer., P. L. Ackerman., R. Cudeck, (Eds.), *Abilities, motivation, and methodology: The Minnesota Symposium on Learning and Individual Differences.* Hillsdale, NJ, England: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 343-374.
 村山 航 (2014). 学習者・自分を動機づける：メタ動機づけ 児童心理, **68**,112-116.
 Nelson, T. O. & Narens, L. (1990). Metamemory: a theoretical framework and new findings. In G. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation (Vol. 26)*. New York: Academic Press. pp.125-173.
 Nelson, T. O. & Narens, L. (1994). Why investigate metacognition? In J. Metcalfe & A. P. Shimamura (Eds.), *Metacognition*, MIT Press, pp.1-25.
 Schwinger, M., Steinmayr, R., & Spinath, B. (2009). How do motivational regulation strategies affect achievement: Mediated by effort management and moderated by intelligence. *Learning and Individual Differences*, **19**, 621-627.
 Schwinger, M., Steinmayr, R., & Spinath, B. (2012). Not all roads to Rome – comparing different types of motivational regulation profiles. *Learning and Individual Differences*, **22**, 269-279.
 梅本貴豊. (2013). メタ認知的方略、動機づけ調整方略が認知的方略、学習の持続性に与える影響. 日本教育工学会論文誌, **37**, 79-87.
 梅本貴豊・田中健史朗. (2012). 大学生における動機づけ調整方略. パーソナリティ研究, **21**, 138-151.
 Wolters, C. A. (1998). Self-regulated learning and college students' regulation of motivation. *Journal of Educational Psychology*, **90**, 224-235.
 Wolters, C. A. (1999). The relation between high school students' motivational regulation and their use of learning strategies, effort, and classroom performance. *Learning and Individual Differences*, **3**, 281-299.
 Wolters, C. A. (2003). Regulation of motivation: Evaluating an underemphasized aspect of self- regulated learning. *Educational Psychologist*, **38**, 189-205.
 Wolters, C. A. (2011). Regulation of motivation: contextual and social aspects. *Teachers College Record*, **113**, 265-283.

